

KANSAI GAIDAI UNIVERSITY

コーリングから見た大学生活の意味深さの特徴： 性別と学年に着目した定量分析

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 関西外国語大学・関西外国語大学短期大学部 公開日: 2018-04-05 キーワード (Ja): コーリング, 大学生活の意味深さ, キャリア教育, キャリア意識, 仕事の意味 キーワード (En): 作成者: 古田, 克利 メールアドレス: 所属: 関西外国語大学
URL	https://doi.org/10.18956/00007787

コーリングから見た大学生生活の意味深さの特徴

— 性別と学年に着目した定量分析 —

古 田 克 利

要 旨

本稿の目的は、大学生生活（勉強、サークル、アルバイト）の意味深さをコーリングの視点から捉え、その特徴を明らかにすることである。分析に用いたデータは、A大学の学生を対象に行ったアンケート調査で得た601件の個票データである。意味深さのバランスにもとづく学生のタイプを検討したところ、「すべての活動に意味深さを感じない学生」「サークルにのみ意味深さを感じる学生」「すべての活動に意味深さを感じる学生」「勉強とアルバイトに意味深さを感じる学生」の4タイプが抽出された。また、男性において「サークルにのみ意味深さを感じる学生」の割合が高く、女性において「すべての活動に意味深さを感じる学生」の割合が高かった。さらに、1年生において「サークルにのみ意味深さを感じる学生」の割合が高く、3年生において「すべての活動に意味深さを感じる学生」と「勉強とアルバイトに意味深さを感じる学生」の割合が高い特徴が明らかになった。

キーワード：コーリング、大学生生活の意味深さ、キャリア教育、キャリア意識、仕事の意味

1. 問題と目的

(1) はじめに

本研究の目的は、大学生生活の意味深さをコーリング（calling）の指標を用いて測定し、その特徴を検討することである。特に、大学生生活の主要な活動である勉強、サークル¹⁾、アルバイトの3側面に対する意味深さに焦点をあて、各側面の意味深さのバランスにもとづく大学生のタイプを明らかにする。さらに、大学生のタイプと性別および学年との関連を探索的に検討する。なお、本稿では大学生生活の意味深さを「個人が大学生生活の諸側面（勉強、サークル、アルバイト等）に、情熱的に強く惹かれている程度の認知」と操作的に定義し、コーリングの指標を用いて測定する。その詳細については、次節で述べる。

はじめに、本研究が大学生生活の意味深さに着目する理由を、スキーマ理論の枠組みを用いて述べておきたい。個人が保有する、ある対象に対する意味は、その個人が保有するスキーマとして理解することができる。スキーマとは、ある物事を理解するために必要な、その物事に関

係するさまざまな知識のことであり²⁾、特に、ある社会における、ある特定の地位の人に期待される行動や規範についての知識構造を役割スキーマと呼ぶ³⁾。また、スキーマは、上位、下位の階層的な関係によって結びついており、複数のスキーマが階層形式のネットワークを形成することによって人間の行動が出来上がっているとされる⁴⁾。これを、本研究が着目する大学生活の意味深さにあてはめて考えると、次の通りとなる。すなわち、学生時代の体験を通じて、大学生活の具体的活動（例えば、勉強、サークル、アルバイト等）に対する意味（＝下位スキーマ）が形成され、その内容は、その個人が生きる年代の主要な役割（例えば、学生であれば学習者としての役割）に対する意味（＝上位スキーマ）の形成に影響を与える。そして、学生時代に形成された上位スキーマは、社会人になった後も主要な役割（例えば、労働者としての役割）に対する意味（＝上位スキーマ）として継承され、個人が従事する具体的な仕事に対する意味（＝下位スキーマ）の形成に影響を及ぼす可能性がある。例えば、青年期に、青年期の主要な役割（例えば、学習者としての役割）に対するポジティブな意味づけを獲得した者は、その意味づけ（主要な役割に対するポジティブな意味づけ）を上位スキーマとして保有し続ける。そして、青年期に形成された主要な役割に対する意味づけが、成人期の主要な役割（例えば、労働者としての役割）に対するポジティブな意味づけとして、継承される可能性がある。その結果、成人期において個人が従事する具体的な仕事に対して、ポジティブな意味づけを形成しやすくなると考えられる。つまり、働く者の仕事に対する意味づけは、仕事そのものから影響を受けるとともに、学生時代に形成されたスキーマからも影響を受ける可能性がある。言い換えると、大学生活の意味深さは、将来の仕事に対する意味深さに影響を与え得る。

このように考えると、キャリア教育研究の文脈において、青年期における職業観の形成やキャリア意識の涵養と同じ程度に、大学生活の意味形成に関する研究蓄積が求められよう。しかし、これまで青年期における職業観の形成やキャリア意識に関する研究は蓄積されつつあるものの⁵⁾、大学生活の意味に関連する研究は限られており⁶⁾、大学生活の意味深さを直接的に扱った研究は見当たらない。そこで本研究では、大学生活の意味深さに焦点をあて、その特徴を検討する。とりわけ、大学生の主要な活動領域である勉強、サークル、アルバイトの3側面に対する意味深さに焦点をあて、コーリングの指標を用いて各側面の意味深さを測定する。そして、各側面の意味深さのバランスにもとづき大学生を分類し、性別および学年との関連性を明らかにする。

(2) 問題

キャリア教育研究の文脈において、青年期における職業観の形成やキャリア意識の涵養と同じ程度に、大学生活の意味形成に関する研究蓄積が求められることを前節で述べた。加えて、近年のキャリア研究分野における特徴のひとつに、現実に対する個人の意味づけを重視する社

会構築主義的アプローチにもとづく研究の増加があげられる⁷⁾。しかしながら、学生生活、とりわけ大学生生活の意味深さを直接的に扱った研究は、現在のところ見当たらない。そこで、現実に対する個人の意味づけに関する先行研究を概観し、大学生生活の意味深さの概念的整理を行いたい。本節では、まず、大学生生活の意味の2側面（社会的側面、個人的側面）について触れ、本研究が大学生生活の意味の個人的側面に着目したものであることを述べる。次に、大学生生活の意味の対象、測定尺度および水準の視点から先行研究を整理し、本研究が捉えようとする大学生生活の意味深さの立場を相対的に整理する。最後に、大学生生活の意味深さの測定指標として本稿が用いるコーリングの概念を概観したうえで、本研究における大学生生活の意味深さの定義を述べる。

(2) - 1 大学生生活の意味の2側面（社会的側面、個人的側面）

人生の意味に関する研究は、主に“meaning of life”と“meaning in life”の2つに区分することができる⁸⁾。正木・岡田（2014）は、この区分を働くことの意味の文脈に置き換え、“meaning of work（働くことの意味）”と“meaning in work（働くことにおける意味）”として区分し、前者を働くことの本質や働くこととは何かを突き詰めて考えるもの、後者を個人的な意味を扱うものとして整理している。また、Fox（1980）は、仕事を通じて得られる成果を、「予期される成果」と「受け取られた成果」に区分し、前者を「仕事の社会的意味」のひとつ、後者を「仕事の個人的意味」のひとつとして分類している。すなわち、仕事の本質が何であり、仕事から何が得られるかを個々人は文化を通じて学習し、それらが予期される成果として、「仕事の社会的意味」に映し出される。一方、「仕事の個人的意味」は、働くことによって得られたと個人が知覚する成果に関わる⁹⁾。概念的に整理すると、「仕事の社会的意味」が、Ebersole & DeVore（1995）のいう“meaning of life”、および正木・岡田（2014）の“meaning of work”に相当する。他方、「仕事の個人的意味」が、Ebersole & DeVore（1995）の“meaning in life”、および正木・岡田（2014）の“meaning in work”に相当するといえる。

大学生生活が人生の一部を構成する活動のひとつであることを踏まえれば、大学生生活の意味に対しても、人生や仕事の意味と同様に整理できよう。すなわち、大学生生活の意味は、ひとつは「大学生生活の社会的意味」として、もうひとつは「大学生生活の個人的意味」として区分される。ここで「大学生生活の社会的意味」とは、大学生生活の本質が何であり、大学生生活から何が得られるかを表すものであり、個々人は文化を通じてこれを学習する。一方の「大学生生活の個人的意味」とは、実際に、大学生生活を過ごす中で得られたと個人が知覚する成果に関わるものであるといえる。本研究は、大学生が勉強やサークル、アルバイト等の実体験を通じて得られる意味深さに焦点をあてるものであるから、後者（＝「大学生生活の個人的意味」）の視点に立つ。上記の議論を整理すると、表1の通りとなる。

表1 大学生生活の意味の2つの側面

大学生生活 の意味	大学生生活の社会的意味 = 大学生生活の本質が何であり、大学生生活から何が得られるかを表すもの。	(関連する概念) ・ meaning of life ^(注1) ・ meaning of work ^(注2) ・ 仕事の社会的意味 ^(注3)
	大学生生活の個人的意味 = 大学生生活を過ごす中で得られたと個人が知覚する成果に関わるもの。 ^(注4)	(関連する概念) ・ meaning in life ^(注1) ・ meaning in work ^(注2) ・ 仕事の個人的意味 ^(注3)

注1 Ebersole & DeVore (1995) にもとづく。

注2 正木・岡田 (2014) にもとづく。

注3 Fox (1980)、中村 (1991) にもとづく。

注4 本研究は「大学生生活の個人的意味」を扱う。

(2) - 2 大学生生活の意味の対象、測定尺度および水準

前項では、大学生生活の意味には社会的意味と個人的意味の2つの側面があり、本研究が着目する大学生生活の意味深さが、大学生生活の個人的意味の側面から見たものであることを述べた。では、大学生生活の意味深さは、具体的にどのようにして捉えられるだろうか。この点を検討するために、大学生生活の意味の対象、測定尺度および水準の視点から、大学生生活の意味に関連する主な先行研究を概観する。取り上げる先行研究は、大学生生活の意味に関連する内容を扱った溝上 (2009) と高坂 (2016) である。

まず、溝上 (2009) は、大学生生活の過ごし方を、授業、クラブ・サークル、アルバイト、読書、同性・異性の友人とのつきあい、ゲームなど17項目の側面に分類し、1週間に費やす各項目ごとの時間数を8段階評定で測定した。そして、測定した時間数を因子分析し、「授業外学習・読書」、「インターネット・ゲーム・マンガ」、「友人・クラブ・サークル」の3因子を抽出している。さらに、抽出した3因子の得点を用いてクラスター分析をおこない、5タイプに分類した。このようにして求めた大学生生活の過ごし方と、将来設計や充実感等との関連を明らかにしている。溝上 (2009) を大学生生活の意味の視点から整理すると、(1)意味の対象を大学生生活 (17項目) とし、(2)意味の測定尺度を大学生生活における各活動の中心性 (費やす時間)、そして (3)意味の水準を各活動に費やす時間の長短によって捉えたものであるといえる。ところが、溝上 (2009) が抽出した3因子には、「授業」と「アルバイト」の項目が含まれていない。その理由として、昨今の学生はどんなタイプの学生でも、けっこうな時間数を「授業」や「アルバイト」¹⁰⁾ に費やすので、その時間数は大学生生活全体の因子分類には表だって寄与しなかったと考えられると、溝上 (2009) は述べる。このことから、各活動に費やす時間の長短で大学生生活の意味深さを捉えるには限界があることが推察される。なぜなら、勉強やアルバイトに対

する意味深さの程度に関わらず、どんなタイプの学生でも、溝上（2009）が指摘するように長い時間を授業やアルバイトに費やす可能性があるためである。その背景には、近年、大学教育において各授業の予習・復習の時間が増加していることや、授業料や生活費を支出するために学生自身がアルバイトに時間を費やさざるを得ない状況があると推察される。

次に、高坂（2016）は、大学生生活を「勉強」、「部活動・サークル活動」、「アルバイト」、「趣味」、「他者交流」、「資格取得」等の8項目に分類し、各項目の重点度を5件法で測定した。そして、8項目の得点を用いてクラスター分析をおこない、4タイプに分類した。そのようにして求めた大学生生活の重点度と、モラトリアムタイプとの関連を検討している。高坂（2016）を大学生生活の意味の視点から見ると、(1)意味の対象を大学生生活（8項目）とし、(2)意味の測定尺度を大学生生活の重点度によって測定したものである。そして、(3)意味の水準を、各活動への重点度の高低によって捉えたものであるといえる。ところで、高坂（2016）が用いた測定尺度も、溝上（2009）と同様の理由で、大学生生活の意味深さを測定するには限界があるだろう。勉強やアルバイトに意味深さを知覚していなくとも、各々の活動に重点を置かざるをえない状況があると考えられるためである。

上記をふまえ、本研究における大学生生活の意味を、(1)意味の対象、(2)意味の測定尺度、(3)意味の水準の3つの視点から整理すると、次の通りとなる。まず、本稿では大学生生活の意味深さを勉強、サークル、アルバイトの3側面から捉えるものであるから、これらの3側面が(1)意味の対象となる。次に、本稿では大学生生活の3側面に対する意味深さに着目するものであるから、意味深さが(2)意味の測定尺度となる。最後に、(3)意味の水準は、意味深さの知覚の程度（強弱）として整理することができる。先行研究および本研究における大学生生活の意味の対象、測定尺度、水準を整理したものを表2に示す。なお、本研究における意味深さの具体的な測定尺度および水準については、次項で述べる。

表2 先行研究および本研究における大学生生活の意味の対象、測定尺度、水準

	意味の対象	意味の測定尺度	意味の水準
溝上の研究 ^(注1)	授業、クラブ・サークル、アルバイト、読書等、17項目	費やす時間	長-短
高坂の研究 ^(注2)	勉強、部活動・サークル活動、アルバイト等、8項目	重点度	高-低
本研究	勉強、サークル、アルバイトの3項目	意味深さ	強-弱

注1 溝上（2009）による。

注2 高坂（2016）による。

(2) - 3 コーリング

これまでの議論を通じて、大学生生活の社会的意味と個人的意味の2側面と、大学生生活の(1)意味の対象、(2)意味の測定尺度、(3)意味の水準の3視点からそれぞれ検討を進め、本研究が扱う大学生生活の意味深さに接近してきた。最後に、本研究における大学生生活の意味深さの具体的な測定尺度について言及したい。本研究では、大学生生活の意味深さを、近年のキャリア研究分野において注目されているコーリングを用いて測定する。ここでは、コーリングの概念を概観したうえで、本研究における大学生生活の意味深さの定義を述べる。

コーリングの概念は、時代に応じて変化し、その定義が研究者間で統一されているものではない。例えば、柏木(2015)は、Bunderson & Thompson(2009)にもとづき、コーリングの概念を古典的・新古典的・現代的概念の3つに整理している。古典的概念の特徴は、プロテスタンティズムを背景に宗教性を帯びたものであり、具体的には「神が与えた才能を人類の幸福のために用いるときに見出されるもの」等として定義される¹¹⁾。これは、我が国においてコーリングを「天職」と訳す際の定義に近いといえる。次に、新古典的概念では、「他者志向の価値や目的を主要な動機づけの源として持つこと」¹²⁾等と定義され、古典的概念に比べると、神の存在や宗教性が薄れ、他者からの召喚や向社会性を重視するようになる。そして、現代的概念では、自己の目的や意義を重視するものと捉えているのが特徴的であり、「個人がある職業(役割)に人生の目的として情熱的に強く惹かれている状態」¹³⁾等と定義される¹⁴⁾。現代的概念の例で示されているように、コーリングは特定の職業や個人の気質に留まらず、個人の状態を表すものでもある。また、コーリングの現代的概念では、コーリングを自己の目的や意義を重視するものと捉えており、この点において、意味深さとコーリングの概念的な類似性を読み取ることができる。

そこで本研究では、コーリングの現代的概念に注目し、大学生生活の意味深さを測定する指標として、これを援用することとした。具体的には、柏木(2015)のコーリングの定義「個人がある職業(役割)に人生の目的として情熱的に強く惹かれている状態」を参考に、本稿では大学生生活の意味深さを「個人が大学生生活の諸側面(勉強、サークル、アルバイト等)に、情熱的に強く惹かれている程度の認知」と定義する。このように、本研究における大学生生活の意味深さをコーリングの概念を借用し操作的に定義することにより、コーリングの測定尺度を用いて大学生生活の意味深さを測定することが可能となる。

上記の議論をふまえ、本研究の目的をあらためて整理する。本研究では、大学生生活の意味深さをコーリングの視点から捉え、その特徴を明らかにすることを目的とする。具体的には、勉強、サークル、アルバイトの3側面の意味深さを測定し、各側面の意味深さのバランスにもとづく大学生のタイプを明らかにする。そして、大学生のタイプと性別および学年との関連性を探索的に検討する。

2. 方法

(1) 対象と手続き

地方の私立A大学に通う大学生を対象に、アンケート調査を実施した。A大学は、文系学部(3学部)から構成されており、学生総数は1万名を超える。このうち、2学部に所属する大学生を対象とした。質問紙は、2016年9月から2017年7月にかけて、講義または各種ガイダンスの時間中に配布し回収された¹⁵⁾。調査実施の際には、調査への協力は任意であることや、調査を実施した講義の成績評価などには関連しないこと、また回答しなくても不利益は生じないことなどを口頭で説明するとともに、調査票にも明記した。

調査項目・尺度ごとに回答不備の者がいるため、分析の際には回答不備者を除外した。また、4年生の回収部数が7部であったために分析対象から除外し、1年生から3年生までのデータを分析対象とした。最終的な分析対象数は、601部であった。

(2) 調査内容

大学生生活の意味深さ 大学生生活の意味深さを測定するために、コーリングの指標¹⁶⁾を活用した。Dobrow & Tosti-Kharas (2011) の指標では、コーリングの対象を、その状況に応じた言葉に書き換えて使用することが想定されている。例えば柏木 (2015) は、Dobrow & Tosti-Kharas (2011) の指標を用いて、大学生を対象に自分が志望する業界・職業に対するコーリングを測定し、大学生のキャリアに対する自己効力感等との関連性を明らかにしている。Dobrow & Tosti-Kharas (2011) では、10個の質問文を用いて測定しているが、本研究では回答者の負担を考慮し、勉強、サークル、アルバイトの3つの側面に対する項目を3つ、合計9つの質問文を用いた(表3)。「あなたの今の状況についてお聞かせ下さい。」という教示のもと、1「まったくそうは思わない」、2「あまりそうは思わない」、3「どちらとも言えない」、4「ややそう思う」、5「強くそう思う」の5件法で回答を求めた。

上記の他に、性別と学年の回答を求めた。性別は、男性=133 (22.1%)、女性=468 (77.9%)であった。学年は、1年=269 (44.8%)、2年=122 (20.3%)、3年=210 (34.9%)であった。

3. 結果と考察

(1) 大学生生活の意味深さの得点化と特徴

(1) - 1 大学生生活の意味深さの因子構造

大学生生活の意味深さの3つの下位尺度(勉強の意味深さ、サークルの意味深さ、アルバイトの意味深さ)を構成する各質問項目の記述統計量を、表3に示す。平均値は、最小で2.54、最

大で3.56であり、極端な偏りを示した項目、あるいは天井効果・床効果を示した項目は見られなかった。

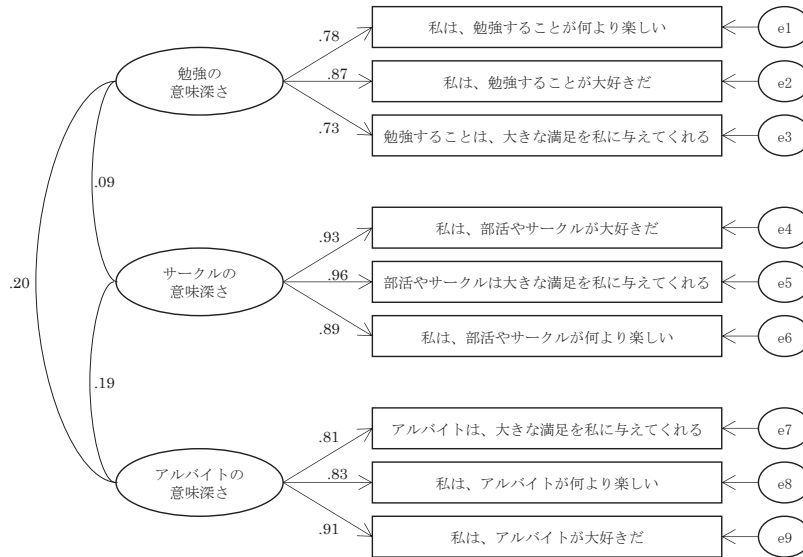
これらを踏まえて確認的因子分析を行ったところ、モデルの適合度指標はGFI=.97、AGFI=.94、CFI=.98、RMSEA=.065であった（図1）。適合度指標がほぼ満足な値を示したことから、この因子構造モデルに従って、後の検討を進めて行くことにした。さらに、この結果をもとに各下位尺度の信頼性係数（Cronbachの α ）を算出したところ、勉強の意味深さ=.83、サークルの意味深さ=.95、アルバイトの意味深さ=.89の値が得られたため、この尺度構成を用いることにした。以降の分析において、大学生生活の意味深さの下位尺度を構成する各項目の合計値を、各下位尺度得点として用いる。

なお、それぞれの下位尺度間の相関係数は有意な正の値を示し、勉強の意味深さとサークルの意味深さ（ $r=.085, p<.05$ ）、サークルの意味深さとアルバイトの意味深さ（ $r=.178, p<.001$ ）、勉強の意味深さとアルバイトの意味深さ（ $r=.176, p<.001$ ）となっている。このことから、本研究の対象となった学生は、これら3つの意味深さを互いに関連させ合いながら、大学生生活の意味深さを知覚していることが示唆される。

表3 大学生生活の意味深さの下位尺度および下位尺度を構成する質問項目の記述統計量

下位尺度	質問項目	平均	標準偏差
勉強の意味深さ	1. 私は、勉強することが何より楽しい	2.54	0.99
	4. 私は、勉強することが大好きだ	2.83	0.97
	7. 勉強することは、大きな満足を私に与えてくれる	3.24	0.99
サークルの意味深さ	2. 私は、部活やサークルが大好きだ	3.25	1.21
	5. 部活やサークルは、大きな満足を私に与えてくれる	3.22	1.19
	8. 私は、部活やサークルが何より楽しい	2.91	1.17
アルバイトの意味深さ	3. アルバイトは、大きな満足を私に与えてくれる	3.56	1.03
	6. 私は、アルバイトが何より楽しい	2.98	1.11
	9. 私は、アルバイトが大好きだ	3.25	1.10

注 $n=601$ ；項目に付した番号は、質問紙に記載した項目の順番を表す。



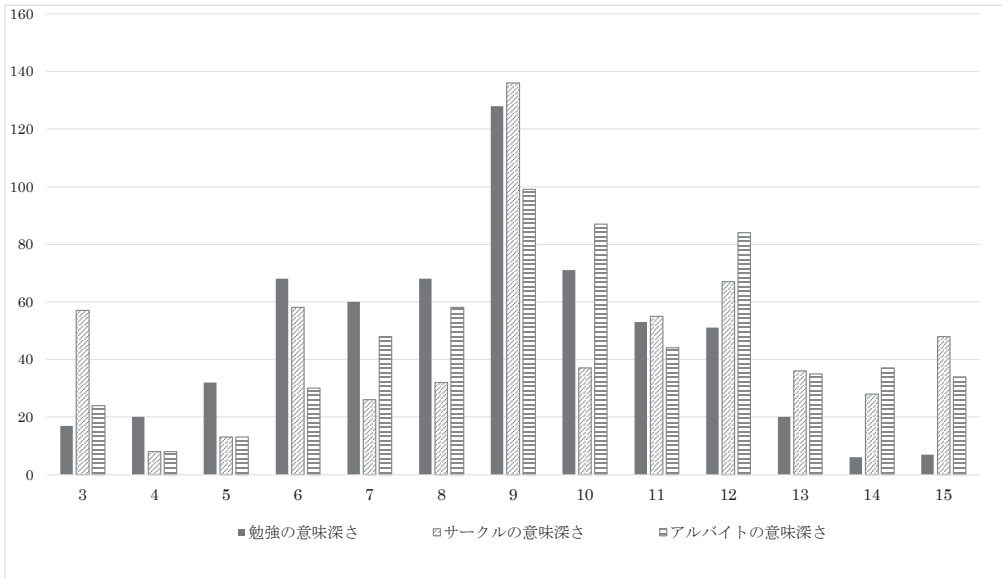
注 GFI=.97 AGFI=.94 CFI=.98 RMSEA=.065

図1 大学生生活の意味深さの確認的因子分析の結果

(1) - 2 大学生生活の意味深さの得点分布と相関関係

次に、大学生生活の意味深さの特徴を検討するため、勉強、サークル、アルバイトの各活動に対する意味深さの得点分布を求めた（図2）。その結果、図2の通り、いずれの下位尺度においても9点の度数が最も多くなっていた。

それぞれの下位尺度の得点分布の特徴は以下の通りである。まず、勉強の意味深さの特徴は、他の意味深さに比べると4点～8点の度数が高く、12点～15点の度数が低い。このことから、サークルやアルバイトに比べると勉強の意味深さの知覚の程度が低い傾向にあると言える。次に、サークルの意味深さの特徴として、3点、9点、15点の度数が他の意味深さに比べて高い点があげられる。特に、3点（最低点）と15点（最高点）の度数が高いことから、サークルの意味深さは、他の活動に比べると極端化した形で知覚されやすい傾向にあると言える。最後に、アルバイトの意味深さに着目すると、10点、12点、14点の度数が高く、他の意味深さに比べて全体的に分布の形状が右側に偏っているように見える。平均値も9.8と最も高いことから、今回の分析対象となった学生のアルバイトの意味深さの知覚の程度は、高い傾向にあると言える。



注 縦軸は n を、横軸は意味深さの得点を表す。

図2 大学生生活の意味深さの分布

また、それぞれの下位尺度の平均の差を確認するために、繰り返しのある 1 要因分散分析を行ったところ、有意な主効果 ($F(2, 1200)=29.0, MSe=7.6, p<.001$) が確認された。多重比較 (Bonferroni法) の結果、勉強の意味深さ (平均=8.60、標準偏差=2.55) <サークルの意味深さ (平均=9.38、標準偏差=3.39) <アルバイトの意味深さ (平均=9.79、標準偏差=2.39) の順に、下位尺度間において有意な平均の差が示された ($p<.001$)。

(1) - 3 大学生生活の意味深さと性別および学年との関係

さらに、大学生生活の意味深さの各下位尺度と性別および学年との関係を見るため、性別および学年を要因とする分散分析を行った。まず、性別を要因とする分散分析の結果を、表 4 に示す。

表4 性別を要因とした分散分析の結果

項目	平均 (標準偏差)		F (df)
	男性	女性	
勉強の意味深さ	8.60 (2.61)	8.60 (2.54)	0.00 (599)
サークルの意味深さ	9.86 (3.58)	9.24 (3.33)	3.52 (599)
アルバイトの意味深さ	9.14 (3.05)	9.98 (2.87)	8.50 (599)**

注1 ** $p<.01$

注2 男性の $n=133$ 、女性の $n=468$

表4より、アルバイトの意味深さにおいて、性別の主効果が有意であった。つまり、女性の方が男性に比べて、アルバイトの意味深さを強く感じていることが明らかになった。一方、勉強の意味深さとサークルの意味深さにおいては、性別による得点の統計的な差異は見られなかった。次に、学年を要因とする分散分析の結果を、表5に示す。

表5 学年を要因とした分散分析の結果

項目	平均 (標準偏差)			F (df)
	1年	2年	3年	
勉強の意味深さ	8.19(2.57)	8.46(2.66)	9.20(2.36)	9.77(598)***
サークルの意味深さ	9.45(3.49)	9.84(3.33)	9.02(3.27)	2.37(598) [†]
アルバイトの意味深さ	9.22(3.04)	9.89(2.80)	10.46(2.71)	11.00(598)***

注1 多重比較 (Bonferroni法) の結果、勉強の意味深さにおいて1年<3年***、2年<3年*、アルバイトの意味深さにおいて1年<3年***

注2 *** $p<.001$, * $p<.05$, [†] $p<.10$

注3 1年の $n=269$ 、2年の $n=122$ 、3年の $n=210$

表5より、勉強の意味深さとアルバイトの意味深さにおいて、学年の主効果が有意であった。多重比較 (Bonferroni法) の結果は、勉強の意味深さにおいて1年<3年 ($p<.001$)、2年<3年 ($p<.05$)、アルバイトの意味深さにおいて1年<3年 ($p<.001$) であった。勉強の意味深さとアルバイトの意味深さにおいて、学年があがるほど得点が高まる傾向が読み取れる。特に、学年ごとの各領域の意味深さの得点の順位を見ると、3年生において、勉強の意味深さとサークルの意味深さの得点が逆転していることが分かる。本研究の対象者が通う大学では、学年があがるに従い大学が指定する必修科目数が減少し、学生が自ら選択し履修する科目数が増加するカリキュラム構成となっている。それゆえ、3年生になると学生の興味や関心にもとづく科目が学べるようになる。このことが、3年生の勉強の意味深さを高める方向に作用している可能性がある。

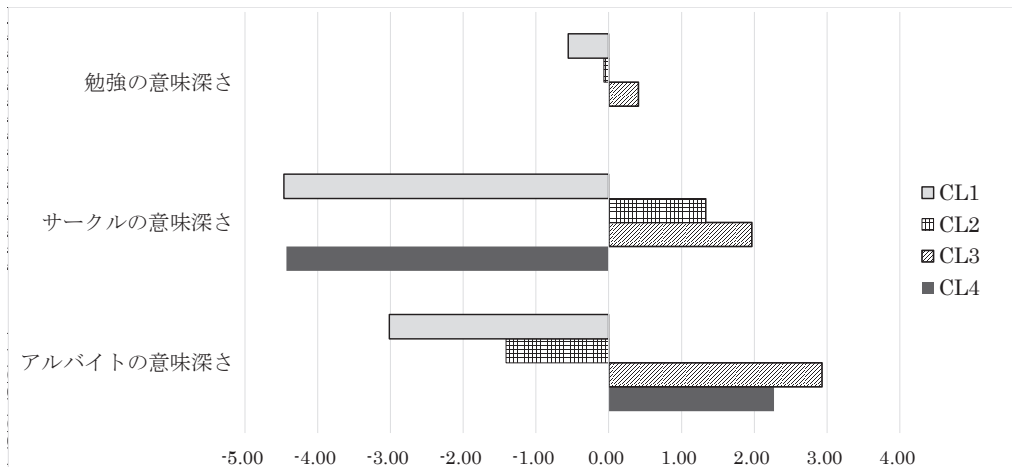
(2) 大学生生活の意味深さにもとづく学生の分類

大学生生活の意味深さの程度によって学生を分類するため、勉強の意味深さ、サークルの意味深さ、アルバイトの意味深さの3変数を用いて、ユークリッド平方距離、Ward法による階層的クラスター分析を行った。各クラスターの有意性と、デンドログラムの形状から、4つのクラスターが適切であると判断した。クラスター1 (CL1) は94名 (15.6%)、クラスター2 (CL2) は267名 (44.4%)、クラスター3は176名 (29.3%)、クラスター4 (CL4) は64名 (10.6%) であった。

各クラスターの特徴を明らかにするため、勉強の意味深さ、サークルの意味深さ、アルバイ

トの意味深さの3変数の平均値について、クラスターを要因とした分散分析を行った。結果、勉強の意味深さ ($F(3, 597)=3.07, p<.05$)、サークルの意味深さ ($F(3, 597)=326.67, p<.001$)、アルバイトの意味深さ ($F(3, 597)=335.66, p<.001$) の通り、すべての変数においてクラスターの主効果が有意であった。また、多重比較 (Bonferroni法) の結果は、勉強の意味深さにおいて $CL1<CL3$ ($p<.05$)、サークルの意味深さにおいて $CL1, CL4<CL2<CL3$ ($p<.05$)、アルバイトの意味深さにおいて $CL1<CL2<CL3, CL4$ ($p<.001$) であった。さらに、各クラスターの特徴を視覚的に検討するため、クラスターごとに勉強の意味深さ、サークルの意味深さ、アルバイトの意味深さの3変数の平均値について、全体の平均値との差を計算し、図示したものが図3である。

図3より、CL1は、すべての意味深さの平均値が他のクラスターよりも低く、また全体の平均値を下回ることが分かる。ことから、CL1に分類される学生のタイプを「すべての活動に意味深さを感じない学生」と命名した。次に、CL2の特徴として、サークルの意味深さだけが全体の平均値よりも高く、勉強とアルバイトの意味深さが全体の平均を下回ることが読み取れる。それゆえ、CL2に分類される学生のタイプを「サークルにのみ意味深さを感じる学生」と命名した。続くCL3は、CL1と真逆の傾向を示し、すべての意味深さの平均値が他のクラスターよりも高く、また全体の平均値を上回る。このことから、CL3に分類される学生のタイプを「すべての活動に意味深さを感じる学生」と名付けた。最後にCL4は、CL2と対称的であり、サークルの意味深さだけが突出して低いことが分かる。このため、CL4に分類される学生のタイプを「勉強とアルバイトに意味深さを感じる学生」と命名した。



注 横軸は、「各クラスターの平均値」から「全体の平均値」を引いた値を表す。

図3 各クラスターにおける大学生生活の意味深さの特徴

(3) 学生のタイプと性別の関連性

前節において、大学生生活の意味深さにもとづく4つの学生のタイプを明らかにした。4つの学生のタイプと性別および学年との関連を検討するため、本節および次節では、学生のタイプと性別および学年とのクロス集計を行った結果と考察を述べる¹⁷⁾。まず、大学生生活の意味深さにもとづく学生のタイプと性別のクロス集計表を、表6に示す。

表6 学生のタイプと性別のクロス集計

学生のタイプ	男性	女性	計
	n(%)	n(%)	n(%)
すべての活動に意味深さを感じない学生	20(15.0)	74(15.8)	94(15.6)
サークルにのみ意味深さを感じる学生	<u>73(54.9)</u>	<u>194(41.5)</u>	267(44.4)
すべての活動に意味深さを感じる学生	<u>29(21.8)</u>	<u>147(31.4)</u>	176(29.3)
勉強とアルバイトに意味深さを感じる学生	11(8.3)	53(11.3)	64(10.6)
計	133(100.0)	468(100.0)	601(100.0)

注 $\chi^2(3)=8.42, p<.05$; 残差分析の結果、有意な値($p<.05$)を示した箇所に下線を引いた。

χ^2 検定の結果、大学生生活の意味深さのタイプと性別の人数の偏りは有意であった ($\chi^2(3)=8.42, p<.05$)。人数の偏りについて残差分析を行った結果、男性においてサークルにのみ意味深さを感じる学生の割合が期待値に比べて有意に高く、すべての活動に意味深さを感じる学生の割合が有意に低かった。一方、女性においては、すべての活動に意味深さを感じる学生の割合が期待値に比べて有意に高く、サークルにのみ意味深さを感じる学生の割合が有意に低かった。この結果は、意味深さを感じる対象の活動の幅が、男性に比べて女性の方が広いことを示唆するものである。この点に関して、大学生生活の充実度の男女差を検討した先行研究¹⁸⁾を見ると、女性の方が大学教育や交友関係などの大学生活全般に適用しやすく、充実度を高めていることが明らかになっており、本研究の結果と整合的であるといえる。

(4) 学生のタイプと学年の関連性

最後に、大学生生活の意味深さにもとづく学生のタイプと学年のクロス集計表を、表7に示す。 χ^2 検定の結果、大学生生活の意味深さにもとづく学生のタイプと学年の人数の偏りは有意であった ($\chi^2(6)=20.0, p<.01$)。人数の偏りについて残差分析を行った結果、1年生において、サークルにのみ意味を感じる学生の割合が期待値に比べて有意に高く、すべての活動に意味深さを感じる学生の割合が有意に低い。また、2年生において、サークルにのみ意味深さを感じる学生の割合が期待値に比べて有意に高い。さらに、3年生においては、サークルにのみ意味深さを感じる学生の割合が期待値に比べて有意に低く、すべての活動に意味深さを感じる学生と勉

強とアルバイトに意味深さを感じる学生の割合が期待値に比べて有意に高かった。

表7 学生のタイプと学年のクロス集計

学生のタイプ	1年	2年	3年	計
	n(%)	n(%)	n(%)	n(%)
すべての活動に意味深さを感じない学生	49(18.2)	14(11.5)	31(14.8)	94(15.6)
サークルにのみ意味深さを感じる学生	<u>131(48.7)</u>	<u>63(51.6)</u>	<u>73(34.8)</u>	267(44.4)
すべての活動に意味深さを感じる学生	<u>64(23.8)</u>	36(29.5)	<u>76(36.2)</u>	176(29.3)
勉強とアルバイトに意味深さを感じる学生	25(9.3)	9(7.4)	<u>30(14.3)</u>	64(10.6)
計	269(100.0)	122(100.0)	210(100.0)	601(100.0)

注 $\chi^2(6)=20.0, p<.01$ ；残差分析の結果、有意な値($p<.05$)を示した箇所に下線を引いた。

この結果について、いくつかの考察を加えたい。まず、すべての活動に意味深さを感じる学生の割合を見ると、学年があがるほど高くなっている。この結果は、高学年になるほど大学生活への適応が進み、勉強、サークル、アルバイトの3領域すべてに対する意味深さを感じられるようになることを含意する。他方で、サークルにのみ意味深さを感じる学生の割合を見ると、1年・2年では全体の約半数の学生がこのタイプに分類されているのに対し、3年生において、その割合は全体の約3割程度へと低下する。これと相対的に、すべての活動に意味深さを感じる学生と、勉強とアルバイトに意味深さを感じる学生の割合が、3年生で高くなっている。この結果は、3年生において、学生の興味や関心の対象が明確になり、意味深さを感じる活動の対象が分化することを示唆するものである。

先行研究では、大学生の学業に対する意欲が学年に応じて変化することが指摘されている。具体的には、入学直後の意欲に比べると1年後期・2年の方が、勉強に対する意欲が低下することが明らかにされている¹⁹⁾。確かに、本研究の結果を見ても、勉強とアルバイトに意味深さを感じる学生の割合は、1年よりも2年の方が低い。さらに、学業意欲の変化を曲線で表現させる別の先行研究²⁰⁾によれば、3年生で学業意欲が高まるという。すなわち、大学入学後に、学業への意欲が一度下がり、その後上がるというU型の曲線の出現頻度が高まるとも高く、意欲の上昇した時期は3年生であった。本研究においても、勉強とアルバイトに意味深さを感じる学生の割合は、1年から2年にかけて一旦低くなった後、3年生でその割合が高まっていた。この結果は、上で述べた先行研究を支持するものであると言える。

一方で、すべての活動に意味深さを感じない学生において、学年による有意な差異が見られなかった。すなわち、各学年の10%から20%の範囲の割合で、すべての活動に意味深さを感じない学生が存在することが明らかになった。これは、学年があがるに従い興味や関心の対象を明確にする学生が増える一方で、学年に関わらず、いずれの活動に対しても興味や関心を持って

ない学生が一定の割合で存在することを表す。ただし、本研究が取り上げた活動は、勉強、サークル、アルバイトの3領域に限定される。先の考察で述べたとおり、3年生において、学生の興味や関心の対象が明確になり、意味深さを感じる活動の対象が分化するならば、次のように考えることもできる。すなわち、本研究の結果は、趣味や交友関係等、本研究で取り上げた3領域以外の活動に意味深さの対象が分化した学生が、「すべての活動に意味深さを感じない学生」のタイプに分類された可能性がある。これを明らかにするためには、意味深さの対象を勉強、サークル、アルバイトの3領域以外に広げて調査を行う必要がある。この点は、本研究の限界であり今後の課題である。

4. まとめと今後の課題

本研究の目的は、大学生生活の意味深さをコーリングの視点から捉え、その特徴を明らかにすることであった。具体的には、勉強、サークル、アルバイトの3側面の意味深さを測定し、各側面のバランスにもとづき、大学生のタイプを明らかにした。そして、学生のタイプと性別および学年との関連性を検討した。

分析の結果、以下に述べる4点の結果が得られた。第1に、大学生生活の意味深さを3側面から測定したところ、勉強の意味深さ<サークルの意味深さ<アルバイトの意味深さの順に、有意な平均の差が示された。つまり、勉強の意味深さが最も低く、アルバイトの意味深さが最も高かった。第2に、大学生生活の意味深さのバランスにもとづき、大学生のタイプを検討したところ、4つのタイプが抽出された。すなわち、「すべての活動に意味深さを感じない学生」「サークルにのみ意味深さを感じる学生」「すべての活動に意味深さを感じる学生」「勉強とアルバイトに意味深さを感じる学生」である。第3に、学生のタイプと性別および学年との関連をみたところ、男性において「サークルにのみ意味深さを感じる学生」の割合が高く、女性において「すべての活動に意味深さを感じる学生」の割合が高かった。このことから、女性の方が勉強や課外活動等の大学生生活全般に適用しやすく、意味深さを感じていることが示唆される。第4に、学生のタイプと学年の関連をみると、1年生において「サークルにのみ意味深さを感じる学生」の割合が高く、「すべての活動に意味深さを感じる学生」の割合が低い。また、2年生において「サークルにのみ意味深さを感じる学生」の割合が高い。さらに、3年生においては「サークルにのみ意味深さを感じる学生」の割合が低く、「すべての活動に意味深さを感じる学生」と「勉強とアルバイトに意味深さを感じる学生」の割合が高かった。この結果は、3年生において、学生の興味や関心の対象が明確になり、意味深さを感じる活動の対象が分化することを示唆するものである。

以上のことは、特定の大学に在籍する学生を対象にした分析から導き出されたものであり、

この結果をただちに一般化して論じることはできない。しかしながら、大学生生活の意味深さの構造と特徴をコーリングの視点から明らかにした点は、今後の「大学生生活の意味」研究を発展させる端緒となるものであり、本研究の意義はこの点にある。

最後に、本研究の限界と、今後の課題について述べる。第1に、本研究で得られた知見は、限られたサンプルに基づくものであり直ちに一般化することはできない。今後、地域や学部を跨るサンプルを収集し、本研究で得られた結果と比較、検討する必要がある。

第2に、考察でも触れたように、本研究が対象とした大学生生活の活動領域は、勉強、サークル、アルバイトの3領域に限定されている。これら3領域の活動以外の対象を含めた項目を用いた調査を実施し、大学生生活の意味深さの構造をより詳細に明らかにしていく必要がある。

第3に、本研究は横断的データに基づくものであるから、大学生生活の意味深さに基づくタイプの変化を検証したものではない。今回の結果からは、学年があがるに従い意味深さを感じる活動の対象が分化することが示唆されたものの、これを実証するためには縦断的調査に基づく分析を行う必要がある。加えて、意味深さの形成や分化に影響を与える要因も検討する必要がある。さらに、縦断的調査を通じて本稿の冒頭で述べた問題に接近することが可能となる。すなわち、学生時代に形成された意味深さが、成人期における主要な役割に対する意味深さに継承されることを検討することである。

注

- 1) 部活動やサークル（学内外を問わず）等を指す。
- 2) 西田（2000）による。
- 3) Augoustinos & Walker（1995）による。
- 4) Brewer, Dull & Lui（1981）による。
- 5) 例えば、広井（1986）、寺田（2014）、浦上（2015）等。
- 6) 例えば、溝上（2009）、高坂（2016）等。
- 7) 例えば、Hansen（1996）、Savickas（2005）等。
- 8) Ebersole & DeVore（1995）による。
- 9) 中村（1991）による。
- 10) 厳密には「家庭教師や塾の講師以外のアルバイト」である。
- 11) 柏木（2015）による。
- 12) Dik & Duffy（2009）にもよる。
- 13) 柏木（2015）による。
- 14) コーリングの概念が現代的概念に収束されるのではなく、むしろ幅広く捉える動きが見られるように

なっているというDik & Duffy (2009)の指摘に留意する必要がある。

- 15) 同一人物の重複回答を避けるため、既に同様のアンケートに回答した者は、複数回の回答・提出は不要であることを口頭で説明した。
- 16) Dobrow & Tosti-Kharas (2011)による。
- 17) あらかじめ性別と学年のクロス集計を行い、人数の有意な偏りが無いことを確認している ($\chi^2(2) = 0.57, n.s.$)。
- 18) 巴 (2011) による。
- 19) 例えば、後藤 (2003)、溝上 (2004)、松島・尾崎 (2009) 等。
- 20) 上田・恒吉 (2013) による。

参考文献

(日本語文献)

- 上田佳苗・恒吉徹三「大学生の学業意欲の変化について」『研究紀要』(山口大学教育学部附属教育実践総合センター) 36、2013年、115-123頁。
- 浦上昌則「大学生の職業観と職業不決断—尾高 (1941) による職業の定義に基づいた職業観の把握—」『アカデミア』(南山大学紀要／人文・自然科学編) 9、2015年、41-56頁。
- 柏木仁「キャリア研究におけるコーリングの概念的特徴の明確化に向けて—コーリングとキャリア関連変数との関係性およびタイプ分け—」『経営行動科学』27(3)、2015年、209-224頁。
- 高坂康雅「大学生生活の重点からみた現代青年のモラトリアムの様相—『リスク回避型モラトリアム』の概念提起」『発達心理学研究』27(3)、2016年、221-231頁。
- 後藤宗理「大学生における進学動機・自己意識・社会意識—専攻分野間の比較—」『名古屋市立大学人文学部研究紀要』15号、2003年、1-18頁。
- 寺田盛紀『キャリア教育論—若者のキャリアと職業観の形成—』学文社、2014年。
- 中村義寿「組織における『仕事の意味』とその動機づけ機能」『名古屋学院大学論集社会科学編』28(1)、1991年、53-80頁。
- 西田ひろ子編『異文化間コミュニケーション入門』創元社、2000年。
- 巴芳「ジェンダー視角から見る大学生余暇生活の過ごし方—同志社大学社会学部卒業生を事例に—」『同志社大学社会学部／大学院社会学研究科ホームページ』2011年。(URL: http://ssgpd.doshisha.ac.jp/questionnaire/2011_02.pdf 2017/10/30)
- 広井甫「職業的自己実現 (要約) 進路指導研究」『日本進路指導学会研究紀要』7号、1986年、42-44頁。
- 正木澄江・岡田昌毅「企業従業員の働くことの意味醸成プロセスに関する探索的検討」『産業・組織心理学研究』28(1)、2014年、43-57頁。
- 松島るみ・尾崎仁美「大学生における学習意欲の変化を規定する要因—横断的・縦断的方法による検討—」

- 『研究紀要』（京都ノートルダム女子大学心理学部） 8、2009年、13-33頁。
- 溝上慎一『現代大学生論～ユニバーシティ・ブルーの風に揺れる』日本放送出版協会、2004年。
- 溝上慎一「『大学生生活の過ごし方』から見た学生の学びと成長の検討－正課・正課外のバランスのとれた活動が高い成長を示す」『京都大学高等教育研究』15、2009年、107-118頁。

(外国語文献)

- Augoustinos, M., & Walker, I. 1995 *Social cognition: An integrated introduction*. London: Sage.
- Brewer, M. B., Dull, V., & Lui, L. 1981 "Perceptions of the elderly: Stereotypes as prototypes." *Journal of Personality and Social Psychology*, 41, pp.656-670.
- Bunderson, S., & Thompson, J. 2009 "The call of the wild: Zookeepers, callings, and the double-edged sword of deeply meaningful work." *Administrative Science Quarterly*, 54, pp.32-57.
- Dik, B. J., & Duffy, R. D. 2009 "Calling and vocation at work: Definitions and prospects for research and practice." *The Counseling Psychologist*, 37, pp.424-450.
- Dobrow, S. R and Tosti-Kharas, J 2011 "Calling: The development of a scale measure." *Personnel Psychology* 64, pp.1001-1049.
- Ebersole, P., & DeVore, G. 1995 "Self-actualization, diversity, and meaning in life." *Journal of Social Behavior and Personality*, 10, pp.37-51.
- Fox, A. 1980 "The meaning of work." In G. Esland, & G. Salaman (ed.), *The politics of work and occupations*. Toronto: University of Toronto Press, 139-191.
- Hansen, L. S. 1996 *Integrative life planning: Critical tasks for career development and changing life patterns*, San Francisco, CA : Jossey-Bass.
- Savickas, M. L. 2005 "The Theory and Practice of Career Construction." In S. D. Brown, & R. W. Lent (ed.), *Career development and counseling: Putting Theory and Research to Work*. Hoboken, NJ: John Wiley & Sons, 42-70.

(ふるた・かつとし 英語キャリア学部講師)